



Title	近世日本のニワトリ利用に関する動物考古学的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	許, 開軒
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15979号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92250
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kaihsuan_Hsu_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 許 開 軒

学位論文題名

近世日本のニワトリ利用に関する動物考古学的研究

・本論文の観点と方法

本論文は、近世日本におけるニワトリの利用の時間的変遷と空間的異同を解明し、ニワトリの利用が日本で普及した過程を探求したものである。

その研究方法としては、江戸、大坂、長崎の武家地、町人地および外国人居住地であった近世の遺跡から出土した鳥類の骨の中からニワトリの骨を識別するとともに、その組織学的・形態学的分析から、各地域・年代におけるニワトリの利用（とくに食材としての利用）頻度、年齢と性比、解体や流通の方法、およびニワトリの形態を明らかにし、さらに各地域・年代の遺跡で認められた傾向の相互比較からニワトリ利用の時間的変遷と空間的異同の理解を試みている。

・本論文の内容

本論文は七つの章からなる。

第1章では、現在のニワトリの利用およびニワトリの起源と拡散について概観している。また、文献史学および動物考古学を視野に、日本におけるニワトリ利用の研究史と近世のニワトリ利用に関する研究の現状と課題について述べている。

第2章では、キジ科遺体の形態学的同定基準の作成と適用の成果が述べられている。キジ、ヤマドリ、飼育下および野生のセキショクヤケイ、様々な品種のニワトリの長骨の形態を観察・比較し、非計測形質によるキジ科遺体の同定基準作成が試みられた。その結果、キジ科の鳥口骨、尺骨、橈骨でニワトリとキジ・ヤマドリの識別に役立つ非計測形質が検出された。また、出島和蘭商館跡から出土したキジ科資料の再検討を通じて、この方法の有効性が確認された。

第3章では、江戸におけるニワトリの利用について明らかにするために、市谷本村町遺跡および四谷一丁目遺跡の資料が分析されている。武家地を中心とする市谷本村町遺跡では、19世紀以降ニワトリの利用が増加し、単一遺構からニワトリが大量に検出された事例が確認された。また、幼鳥や若鳥が少なく、雄が雌より多い傾向が確認された。町人地である四谷一丁目遺跡では、ニワトリは17世紀から多く消費されていたが、18世紀に一度減少し、19世紀に再び増加していた。また、市谷本村町遺跡と同様、19世紀に単一遺構からニワトリが大量に検出された例が認められた。雄が雌より多い傾向は市谷本村町遺跡と共通していた一方、幼鳥・若鳥の割合は市谷本村町より高く、通時的に一定程度食用とされたことが考えられた。また、鳥類の出土が報告された江戸の遺跡におけるニワトリ利用の時期的変遷との比較の結果、市谷本村町遺跡と四谷一丁目遺跡におけるニワトリ利用の特徴は江戸全体の傾向と一致することが確認された。

第4章では、長崎におけるニワトリの利用について明らかにするために、出島和蘭商館跡と魚の町遺跡の資料が分析されている。主にオランダ人が居住した出島和蘭商館跡と町人地であった魚の町遺跡では、ともに17世紀から19世紀までニワトリがもっとも多く食用とされた鳥類と考えられた。両遺跡において幼鳥・若鳥と産卵期の雌鶏が比較的高頻度で消費された一方、足根中足骨からみた性比では雌鶏が雄鶏より多い傾向が認められた。同様の傾向は唐人屋敷跡でも認められており、長崎の町人地と外国人居住地では、17世紀から日常的にニワトリを食用とし、若鳥と雌鶏も頻繁に消費していたことが明らかにされた。

第5章では、大坂におけるニワトリの利用について明らかにするために、大坂城下町跡 OJ04-1 地点の資料が分析されている。町人地であった大坂城下町跡 OJ04-1 地点では、ニワトリは17世

紀中頃からすでに主に消費されていた鳥類であった。また、雄鶏の成鳥が多く、幼鳥・若鳥と雌鶏は含まれるが比較的少ない傾向が認められた。その他の大坂の遺跡におけるニワトリの出土例との比較の結果、大坂では武家地に比べ町人地においてより早い年代からニワトリが多く食用とされた可能性や、雄鶏の成鳥が主に消費された可能性が示された。

第6章では、第3章から第5章で扱った各遺跡におけるニワトリの形態に着目し、その時間的変化と地域間の異同の解明が試みられた。その結果、各遺跡において17世紀から19世紀にわたって現在のチャボに相当する小型の個体が消費されていたことが明らかになった。また、シャモに相当する大型の個体も多く遺跡で利用されていたことが示された。文献史学の知見から「シャモ」や「チャボ」などの品種は江戸時代初期にすでに存在していたと考えられてきたものの、「シャモ」や「チャボ」の可能性のある大型および小型のニワトリが17世紀初頭にすでに広く普及していた可能性が提示された。一方、江戸時代を通じて一般的に食用とされたニワトリは「小国」から作り出された諸品種と同程度の大きさのニワトリであったことが示された。

第7章では、第3章から第6章の成果を踏まえ、ニワトリの利用頻度、年齢と性比、解体や持ち込み方法および形態の観点から、近世日本におけるニワトリ利用について時間的変遷と地域間の異同について考察された。江戸、長崎、大坂の3都市で比較した結果、江戸では19世紀になるまでニワトリを多く利用した屋敷地が少なかったのに対して、長崎では江戸時代を通じて遺跡の帰属を問わずニワトリは主に利用された鳥類であったことが明らかになった。一方で、大坂では武家地に比べ町人地においてより早い年代からニワトリが多く食用とされた可能性が示され、ニワトリの利用が居住者の属性や地域性に関連する可能性が提示された。また、大坂や江戸と比べ、長崎ではより多くのニワトリの幼鳥・若鳥および雌鶏が食用となっていたことなど、地域による利用対象となるニワトリへの選択傾向が異なる可能性が示された。

また、中世以前と近代以降の日本におけるニワトリの利用との比較から、日本におけるニワトリ利用の普及過程が示された。中世までニワトリの骨の出土例は少なく、ほとんどの地域では中世末までニワトリの食用が一般的ではなかったと考えられた。文献史学の知見から、ニワトリの食用は17世紀初頭には一般的ではなかったが、18世紀以降に食用としての需要が高まったとされてきた。そして、19世紀後半になるとニワトリを食べる習慣が一般的になったと考えられてきた。一方で、長崎では18世紀からニワトリが一般に食用とされていた記録がある。本論文で得られた知見と比較すると、江戸では19世紀になるとニワトリの骨の割合が高まること、および長崎では18世紀に先立つ17世紀からニワトリを頻繁に食用としていたことがこれまでに提示されてきた文献史的知見と一致していた。一方で、大坂城下町跡でも17世紀にニワトリが多く食用とされる傾向が認められたことから、近世におけるニワトリの利用頻度は都市によって異なることが明らかにされた。また、その他の地域の遺跡の報告例との比較検討から、食材としてのニワトリの利用は幕末までに広く普及していた可能性が提示された。その後、19世紀後半においてもニワトリの検出頻度が高い傾向は続いており、近代以降食用とされる鳥類はさらにニワトリに偏ったものになったことが示された。最後に、近世日本におけるニワトリの利用に関して、科学分析手法の利用、発生学やタフオノミーからのアプローチ、遺跡内の空間別の検討、およびこれまで未報告だった資料の再検討と出土資料の年代の精査が今後の課題として提示された。